

中村素堂

入門してまだ二、三年だのに何か出品するようにと先輩に勧められたが、そうなる作品の形で書けるのは仮名の方であった。

さつきまつ花桶の香をけば昔の人の袖の香ぞする

という朗詠集にある歌を一首雅箋の半折に書いて出した。これが生まれて初めて展覧会というものに出品した記念の作品である。

その次に何處だかに出したのが、雅箋全紙に楷書で前赤壁賦を書いて出したことは憶えているが、あとは忘れてしまった。ただこの明治書道会の中に春洞先生の直門と、その孫弟子の俊秀も加えて謙慎書道会となり、今日にまでおよんでいるのである。

この増上寺展の時に初めて西川寧先生にお会いした。慶応大学の制服を着ておられたが、この翌年あたり中国文学科を卒業されたのかと思う。二松学舎で漢文を専攻した金子慶雲(のちに清超と改号)先生、このひとは豊道春海先生門下。江川碧潭という駒沢大学出の禪僧も同門、他にも安本春湖、諸井春畦、中村春坡先生などのご門下の人々とも急にお近づきを得るようになり、同門の先輩にはもちろん随分かわいがっていた。

これらの先輩、同輩は、みなそれぞれに実によく勉強していて超之謙に惚れて大分かぶれているもの、鄭道昭一片倒、龍門でなければというもの、それに題跋の研究に精しいもの等々で、じつとしてなんかいられたものではない。

ちよつとした縁で篆刻家であったが書も画も秀れていた同郷出身の新聞静軒先生にお会いすると、この静軒先生のお祖父さんと私の祖父とが親しい友人だったことが判り、ここからまたいろいろ友達が出来て、親しい若海方舟とか磯野学申とか、方丈無々斎とかいつた風流文人方に知己を得、書道界きつての学者といわれた河井荃廬先生にお目にかかることができた。どの友人、知人でも先輩諸先生

でも何か学問的な益を受けなかった人はひとりもないけれど、河井先生の驚嘆に接することができたことくらい大きな学恩はない。

霞洞先生に書を、その学問を河井先生に得たことは実に有り難い幸せだと思っている。

こんな同志のグループみたいなのと良い師があるのだから、そこに何かの研究集会が持たれることはごく自然のなりゆきであった。漢詩を学ぶために俱社という会が出来て、のちの大東文化大学学長土屋竹雨先生を懇請して漢詩の講義と添削を煩し、会場を熊谷恒子女士に甘えて鳩居堂の三階で例会をやることになった。

すると短歌・国文もやりたいと、国文・仮名書きの諸賢から要求され、会場は同じ鳩居堂で講師には品田太吉先生(神宮皇学館大学々長の山田孝雄先生の師)に願って万葉会と名づけて講義を始めた。これは今から考えてまずばらしい企てであったが、万葉会の方は会員のみんなから品田先生は困るという話を持ち上がったてきてしまった。人柄も学殖も申し分がないけれど、大分なご高齢でほとんど歯が抜けておられ、息が漏れるために発音が全く不明に近いので、末席の方などはほとんど何も判らない——というのであった。

どうも申しにくいがお断りして、国学院大学の歌人金子元臣先生を後任に願ってかなり続けてやることができた。

会は二つながら私が幹事役をいつけられ、会費のことから講師の謝礼など、それに両先生ともご酒がお好きなので、終了と同時にちよつとしたつまみで、一、二本佳い酒を召し上がった。先生方もこれは余程お気に召したらしいが、鳩居堂の番頭さんが気をきかして早めにかんのついた匂いがしてくと、急に金子先生の講義がスピードをあげて、精しく読み過ぎると歌は味がなくなるもんだ。この歌は有名だから大抵知ってる——というようなことでみるみるすんでしまう。苦笑して当日閉講。

まあ書に附帯する学問は何でもやろうという意気込みは実にすさまじいものがあった。時の運でもあるが幸せであった。(つづく)

〔筆聞雑記〕中村素堂随筆集(昭和六十三年刊より転載) (『書範』昭和五十六年)